

# ホトトギス

十一月号

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日 運轉者特別供水法第百六十七号  
平成二十七年十一月一日発行 第百十八卷第十一号



## 俳句随想〔四百一〕

汀子

S氏からお手紙を頂いた。いつも熱心に俳句を勉強され論じられているS氏は教養のある温和な高齢の紳士。何かと真摯に質問をされて私の勉強の糧とさせて、頂いている。

「実は『葉喰』と言う季題ですがこれを『葉喰ふ』と動詞として使用したいのですが如何でしょうか。動詞化されているものとして『陽炎』陽炎へる』『踏青』青き踏む』『摘草』草摘む』『麦踏』麦を踏む』などとあります。……私の今考えて居ります句は名詞が並びますので最後『葉喰』を『葉喰ふ』として収まりをよくしたいと考えて居ります。……」とあった。何れも例として上げておられる季題を動詞に使うのは歳時記をご覧になると分るように、季題の傍題として使ったら如何であろうかという意味で太字で書かれてある。「葉喰」を「葉喰ふ」は「葉喰」という季題の成り立ちから無理ではないであろうか。解説を読んでも難しいと思う。

『ホトトギス新歳時記』の改訂版を出す時にホトトギス一千号を記念して委員会を組む、六年間、会議を持って一つずつ検討して来た経緯がある。大変な事業であった。その後も検討し、何回か改訂版を出して来た。新季題や新しい傍題を設定するためには、例句が必要である。その例句が名句ならば、或いは、新傍題として太字で追加されるかも知れないが、あくまでも例句がなければならぬ。

真摯な御質問に対してのお答えになったかどうか分らないが、お返事とさせて頂きたい。

句日記 汀子

平成二十六年十一月三日 関西ホトギス同人会

旅人の心となりて秋深き古都  
折ること願ふこと秋深き古都  
紅葉濃紅葉道を迷ひしや  
古都の秋惜みて集ふ我等かな  
十一月一日 関西ホトギス俳句大会

快晴となりゆく爽やかな空気  
十一月五日 ロイヤル俳壇

対談は 丁々発止 芭蕉の忌  
初冬といふ実感のなき日々  
初冬といふ実感のなき日々  
共々に語り尽さん時雨の忌  
咲くまでは所在失せたる石路の花  
十一月九日 下萌句会

さつきまで雨降りをりし冬日和  
鷹渡る鷹でなかりしかも知れぬ  
誰彼の消息届く冬日和  
これより 大阪倶楽部

快晴の油断となりぬ時雨かな  
これよりは枯葉掃きつつある家居  
冬めける長き滞在旅のもの  
七五三草履が脱げて又脱げて  
積まれある稿債の辺の冬めける  
十一月十一日 綿業倶楽部

日の昇るまでの初霜踏んで来し  
早立ちの靴音ひそめ初霜に  
早は落葉尽せるまでは待つこと  
つひに掃き寄せし落葉の嵩となる  
十一月十三日 清交社

欠席といふことづての冬めける  
立ち止まることなく親し花八手  
朝殊に冬めく風の荒しとも  
引いて来し大根のある暮らしとて

十一月十四日 工業倶楽部

一面の初霜敷ける狭庭かな  
山茶花の咲きつぐ日々を旅にあり  
朝月を仰ぎ初霜踏み旅  
十一月十四日 アネモネ句会

初しぐれ明るき油断ありしこと  
鷹を見しより大空の入れ替る  
御縁とはつかず離れず初時雨  
初時雨ふと息を抜くほどとの  
鷹吸はれゆく田となり点との  
十一月十六日 仰臥海録句会

講話聞くため的小春日なりしこと  
一年に一度の講話聴く小春  
十一月十七日 アサヒカルチャイ

まだ馴れぬ寒さかこちてをりしこと  
暖房にゐて不用意に出掛け来し  
十一月十八日 有恒俳句会

一つ又一つ冬めく庭となる  
冬構終へし安堵の漲れる  
我も又気力で生きん帰る花  
集めても所詮落葉は風のもの  
尽すまで掃き寄すまいぞ落葉  
十一月十八日 無名会

大根を炊いて戻りし主婦の勘  
食欲の戻る大根卸しより  
寒き日の赤の執着ありにけり  
風や昔のほくらしなつかしく  
大根や昔のほくらしなつかしく  
十一月十九日 夏潮句会

茶の花といへば京都の枳殻邸  
消息の乗つて来たりし初時雨  
落葉とどめるすべのなかりけり  
落葉掃く無駄なこととは知りながら  
僧遷化せし消息と初時雨  
園ことに触れて茶の花日和かな

十一月二十日 依頼句「俳句」

旅終へて又旅を恋ふ去年今年  
これよりの日々新しき初暦  
取り敢へず書き込む予定去年今年  
遠き娘の心思ひて年迎ふ  
十一月二十三日 中国ホトギス同人会

二十年てふ歳月の年迎ふ  
記憶とは遠くて近し去年今年  
極めるといふ冬紅葉もき風  
小六月めぐれば心地よき風  
快晴といふ青空も冬のもの  
命日は明日と聞きつづ散紅葉  
風ありて風なくて散る紅葉かな  
十一月二十四日 中国ホトギス俳句大会

その日より落葉尽せる日よ幾度  
千羽鶴にも露霜の降りしもの  
燃えつづく火よ鎮魂の冬の又  
十一月二十七日 きつら句会

鷹かとも隼かとも失せにけり  
一日に会合二ヶ所冬の雨  
冬耕の帰り仕度をせかす雨  
十一月二十八日 時雨句会

遠くより 彩色る大地 柿落葉  
忙しき一と日冬めくこと忘れ  
蓮根掘り終へし両手を高く上げ  
一日の時間止まつてくれぬ冬  
仕事また一つふやして冬ざる  
冬めくや仕事の山を残しつつ  
十一月二十九日 句会と講演の会

世の中を見回してをり青写真  
東京の滞 長し冬の雨  
病む人の消息 二三冬の雨  
今年もう師走の日日を余すのみ  
帰り花見て帰り花見失ふ

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十六年十一月一日 野分舎屋例会

凧に乾ききつたる涙かな

柀に持ち去られたる運かとも

朴落葉卓に華やぐものとして

朴落葉足裏に楽の生れけり

十一月一日 虚子記念文学館投句  
秋惜みつつ 俳磚に君偲ぶ

十一月二三日 関西ホトトギス同人会 大会

初鴨の水尾の長さにある主張

古都の空引鴨に引つ張られゆく

参道に入るより鹿の視線浴び

文化の日古都に出会ひを重ねつつ

十一月三日 「あらうみ」 近詠

古都の空紅葉且散る高さかな

初鴨に古都の空ほほゑんである

その中に角切されし優しき目

古都の空引き絞りたる鹿の声

文化の日古都千年を引き寄せて

十一月四日 刈谷市民俳句大会

秋惜む大和を癸ちて三河へと

柚子の香に引き締まりたる卓の上

十一月六日 蕉心会

咲くものを路地に集めて秋惜む

震へつつ末枯れてゆく一樹かな  
十一月八日 開巻会

神送る水琴窟の音色かな

七五三君の晴れ着に負けてをり

晴れの国へ時雨を癸ちて来し旅路

鴨の水尾長さは馴染みゆく早さ

冬桜 零も色の一 尽し

冬桜園の歳月知り 鼓動

黄落を誘うてゐる地の鼓動

十一月十日 朝日カルチャー若草句会

石路咲いて寺に忌心集ひ来し

拍手に和せる手締めや西の市

初霜の降りて星空整へり

喧騒を車道に広げ西の市

吉備津彦神社石路明りの句碑に

初霜の降りプロ野球終はつてもた

十一月十一日 カトリック新聞選者吟

初時雨弥撒へ昂る歩幅かな

十一月十三日 土筆会

蕎麦刈りて次の命を待つ大地

石路明り忌日の黙を解きゆく

冬めくや人の心の乾きゆく

収録を終へしスタジオ冬めける

十一月十三日 「俳句さく咲く」 収録

七五三 赤白黄色 ピンク 黒

十一月十五日 明石の秋を詠む吟行俳句会

潮の香を乗せて明石の神渡

十一月十六日 虚子記念文学館句会

十一月二十日 登高会

蒟蒻を掘りて毛の国住み古りて

沢庵を漬けて禅寺守りけり

大綿の飛びて伝説多き寺

大綿に備前の空は柔らかく

沢庵を漬けて陸奥美人かな

吉備津彦神社大綿従へて

十一月二十日 野分会東京例会

朴落葉山の奥には猿の宴

凧を統べて都心の摩天楼

凧に星明かされてゆく都心

十一月二十三、二十四日 中国ホトトギス同人会 大会

七五三抜ければ天守てふ静寂

白々の列車勤労感謝の日

朝一の列車勤労感謝の日

戦なき城燃えるかに冬紅葉

平和の灯冷たく揺れてをりにけり

冬帽をとりて祈りの人となる

黄落やドームに祈り深かりし

十一月二十五日 若水句会

昨日安芸今日は武蔵や冬うらら

黄落を癸ち黄落に旅終る

帰り花都心の雨に震へ咲く

十一月二十六日 目黒学園句会

週末の旅は続き冬に入る

大根の日本の夕餉整ひぬ

小春日の風と對話をする司祭

# 雑詠 廣太郎 選

薰風の中に生まれてきしばかり 龍ヶ崎 今橋眞理子

短夜の闇震はせて赤子泣く 同

日々変はるみどり児の顔窓若葉 同

足さするだけの見舞や若葉冷 岡山 伴 明子

点滴とアイスクリーム一匙と 同

新樹晴覆ふべールや母の逝く 同 須藤常央

芍薬は八方美人かも知れぬ 静岡 同

ハンカチを口に泣いたり笑ったり 同

汗のまま埃のままに飯を食ふ 同

神輿昇くために帰れと父の文 大津 石川多歌司

初鯉高値承知の粹を買ふ 同

緑蔭を分かつ義仲巴塚 同

ごきぶりの出て別人となりにけり 袋井 湖東紀子

敷藁に水瓜の花の守らるる 同

梅雨の傘干して城下に住み古りぬ 同

噴水に仕上がる水の利那かな 香川 湯川 雅

推敲の手が探しゐる缶ビール 同

青蔦の影の上へ影歪みたる 同

初夏の森の光を総身に 箕面 井上浩一郎

水中花開き切るときみな笑まふ 同

海霧流れ国後の影はやあらず 同

合掌の指の先まで緑なる 熊本 岩岡中正

麦熟れて妻は聖書に余念なく 同

墓ふみとどまるといふ力 同

夏草に踏み込んでゆく若さかな 長岡 安原 葉

夏至使ひ切りて遙々集ひけり 同

夏果てし外はまだ夏至の薄明り 同

百万の石を盾とし城涼し 奈良 古賀しづれ

天に浮く水に浮く城万緑裡 同

金色に仕立て浪花の涼み舟 同

一山が香りて蜜柑花咲くと 熱海 嶋田一歩

花蜜柑山に家族の散り住むと 同

花蜜柑山を降り来て漁父となる 同

天帝の乗り移りたる凧となる 福山 竹下陶子

紫陽花の色の戯れをりにけり 同

繚乱の螢火やがて止なす 同

たくさんの小鳥来てゐる忌日かな 東京 今井消子

晴れた日は小鳥になつて会ひに来る 同

雨音の向かうに小鳥来てをりぬ 同

代々の苦勞を田植機に托す 八尾 山下美典

田植終へ平らとなりし里の景 同

あめんぼう流れ計算して滑る 同

# 雑詠句評（十月号より）

霜衣・純也・雅

公次・しげ人・佳乃

さい雪・くに彦・仁義

一步・廣太郎

## 踏絵見て空の眩しくありにけり 周南 小川龍雄

この「踏絵」は、もちろん政策として行われていた絵踏でなく、かつて使われていた木版や銅板の絵像であろう。私が見たそれは、意外なほどに小さかった。摩耗して、もう何の絵か判別できなかつたのを覚えている。歴史が纏わりついているからか、絵像そのものが暗い物に見えた。小さくて暗い塊であった。

踏絵をご覧になって、外へ出られたのだろう。まだ絵像の暗さが残っている目には、空はあまりにも眩しかったことだろう。展示されている踏絵を見る下向きの視線が、一転、空に向けて広がるのも鮮やかな手法と申すほかない。（霜衣）

現在でも所縁の場所や博物館等に行けば実際使われていたところの「踏絵」は展示されているが、これを見た作者の心は、遠く禁教の時代に遡っていたのではないだろうか。歳時記に掲載されているこの季節の季節の、紛う事のない二月の空らしい心持ちも、短い詩からひしひしと伝わってくる。（廣太郎）

## 人生の初の緊張入学子 吹田 大橋 暁

自分がどうだったかは記憶にないが、うちの三人の子どものことを思い出すと、まさにこの句の通りだったように思う。小学一年生の入学式、講堂の席に親と離れて並んで座って、周りには先生、後ろには先輩たち、壇上には来賓、校長先生……。あの独特の雰囲気は、なるほど、人生の初の緊張の一瞬にちがいない。

（純也）

小学校一年生の入学式は、確かにその人の人生で初めての公での大きな出来事であろう。この日は勿論親も緊張しているものではあるが、子供にとっては初めて経験する事で、気持の昂りは如何様であろう。あどけない子供の姿ではあるが、将来の大事を秘めた雄々しさも見て取れる。（廣太郎）

〈以下略〉

天地有情

一枚の踏絵の疵の語るもの  
 東京 稲畑廣太郎  
 鳴雪忌梨園の星の追ふやうに  
 同  
 句敵の三十人と花の膳  
 相模原 木村享史  
 別れ惜しとは人よりも花にかな  
 同  
 インクまでみどりに換へてみどりの日  
 神戸 後藤比奈夫  
 こどもの日ですよと娘から電話  
 同  
 みな若く虚子と写りて露涼し  
 長岡 安原 葉  
 戻らざる若さと言へど汗涼し  
 同  
 あさつては遊子の忌日額の花  
 東京 今井千鶴子  
 その葉裏でんでん虫がいつも居る  
 同  
 海の綺羅浜屋顔に及び来る  
 同 河野美奇  
 梅檀の香や潮の香の途切れたる  
 同  
 遠く来しそれぞれに風薫るなり  
 大阪 佐土井智津子  
 いつの間に歳を取りしか涼しけれ  
 同  
 薫風の花鳥諷詠塾へいざ  
 神戸 千原叡子  
 朝涼し当時の如く席は籤  
 同  
 香水の香のきよきよとしてをりぬ  
 同 後藤立夫  
 けむりの木燃えて広がるやうに咲く  
 同

大西瓜どすんと置いて帰りけり  
 熊本 岩岡中正  
 夢の数ほど睡蓮の咲きにけり  
 同  
 全身で泣くみどり児に風薫る  
 龍ヶ崎 今橋真理子  
 薔薇の白ただようてゐる暮色かな  
 同  
 よみがへる昔の暮し蚊帳の中  
 東京 橋本くに彦  
 蚊帳に入るしぐさ大正昭和かな  
 同  
 立話三人となる薄暑かな  
 我孫子 副島いみ子  
 二回目の濯ぎも乾く夏の蝶  
 同  
 月蝕の露の太虚となりにけり  
 福山 竹下陶子  
 冬ぬくき両手に迎へ下さるゝ  
 同  
 梅の実の一つを挽げば一つ落つ  
 吹田 大橋 暁  
 ひと晩の土砂降りありて梅雨に入る  
 同  
 手をつなぎ若葉の風と戻りけり  
 神戸 浜崎素粒子  
 豆飯を嫌うて豆を残しけり  
 同  
 山よりも都会に育ち鳥の子  
 袋井 湖東紀子  
 梅雨に入る厨くまなく拭き上げて  
 同  
 夕暮は徐々に来るもの白牡丹  
 熱海 嶋田一步  
 来し日差し受けとめぬしは朴の花  
 同

花子選

## 庭物語(二十) 稲畑汀子

わが家には手狭な庭があり、手入れは思いつくままに庭師に頼み、すぐに又変更するという具合である。

姑の没後、千坪の土地を四人の兄弟各家族で分けて二百五十坪ずつの土地を所有することになった。夫が亡くなった後も、我々一家は姑と一緒に住んで来た。姑は昭和十一年に楽しんで建てた家を、何かにつけ大事にしてほしいと言つて亡くなった。家の主な部分を残して切り離し、分けられた土地へ移動し、補修して今も大切に使用している。残した建物が大きいので、庭として残された部分は手狭である。それを如何に有効に調べて行くかを工夫するのも又楽しみである。

昔浜辺であつたのか、松林の名残の松が何本もあつて、狭い庭に林立している。それらはここが風致地区のために伐ることは出来ない。加えて、楽しんで植えたマロニエ、合歡の木、枝垂桜に黄桜、薄墨桜。昔からある泰山木の太樹。さらに高知から一本の金明竹を船で運んで来て植えて下さつたのが今では三十本ちかくに増えた。

それらが狭い庭の空を覆つて、残された庭面に青芝を植えるが、日当たりが悪く育たないのが悩みの種である。

「口丸さん、種から大分育つて来た青芝だけれど、剪らないでくださいよ」

「却つて長くなりすぎて倒れて枯れるのではないかと思ひます」

「その時はその時よ。色々やつて見ましようよ」

種を蒔いて育つた芝は大きくなってきたが、まるで雑草園である。

「前に、二十センチほどになつたので剪つたでしょ。その後どん枯れてしまつたわね。今回は芝の根が張るのを辛抱強く待つて、それから剪つたらどうかしら」

「わかりました」

彼は、まことに不満そうであつた。

毎朝、雨戸を開けると芝生が気になる。伸びた芝生の先が枯れ色になりふにやふにやとして倒れているのが気になつた。

「口丸さん、やっぱり少し剪つて見る？少し根づいたかもよ」

「はあー」

「十センチほど剪つて……」

「はあー。しかし、結局木が繁つて日が当たらないのがいけないのだと思ひますがねえ」

ぶつぶつ言いながら芝を剪つてくれた。そして栄養剤を撒いたと言つて歸つて行つた。



毎週金曜日、伊丹空港を発って東京へ行き、朝日俳壇の選句をして芦屋に帰ってくる。ときに東京滞在が長くなり、東京から各地へ伺うこともある。

朝の飛行場は清々しい。窓から滑走路を見渡すと、芝生が青々としていて美しい。青芝の縁を飾るように白い穂がふさふさと茂り、飛び立つ時の風に靡いて美しいのが印象的であった。

「あれはなんだろう。そうだ茅花に違いない」  
わが家の芝生の情けない中に茅花を靡かせたらどうであろうか  
と思いはじめた。

「口丸さん、茅花の種を探して来てほしいのだけれど」

「つばなですか」

「そう、茅花。一層、芝生の代わりに茅花の庭にして見ようかしら」

「芝生に栄養剤を撒いておきました。芝の種も買っておきました。もし枯れたらまた撒いて置きます」

「あら、そう。でも今度は何とか育って行くかも知れないわね」  
茅花談義はそれからでも遅くはないと諦めた。

